

政策研究レポート

「魅力ある高校づくり(高校魅力化)」をいかに評価するか

～「高校魅力化評価システム」の開発を事例として～

公共経営・地域政策部 [東京] 副主任研究員 喜多下 悠貴

公共経営・地域政策部 [東京] 主任研究員 阿部 剛志

【要 旨】

■証拠に基づく教育政策・実践の要請に対応した、「高校魅力化」を評価する仕組みの開発

- 証拠に基づく政策立案(Evidence Based Policy Making(EBPM))に対する要請が高まる中で、筆者らは一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、高校と地域との連携による、魅力ある高校づくり(高校魅力化)が、生徒の学習環境と、そこで学ぶ生徒の変化を定量的に可視化するための仕組みである「高校魅力化評価システム」を開発し、検証作業を進めている。

■高校魅力化評価システムの調査設計

- 高校魅力化評価システムは、生徒及び大人に対するアンケート調査より構成されている。「生徒の学習活動」「地域の学習環境」「生徒の能力認識」「生徒の行動実績」「生徒の満足度」の5つの要素について幅広く尋ねており、地域と高校との連携による高校魅力化を多様な側面から捉え、評価できる設計としている。
- 生徒の資質・能力に関する調査項目は、これからの社会で求められる「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの視点を軸に構成されている。主観的な意識の聴取という限界はあるものの、将来的には継続的なデータ取得により、生徒の変化を捉えることを志向している。

■高校魅力化実践校の生徒は、全国の高校生に比べ、社会性に係る意識に大きな差

- 高校魅力化評価システムの調査項目を用いて、島根県内の中山間地域・離島に位置する高校魅力化実践校(魅力化校)の生徒と、全国調査における高校生の意識の比較を行ったところ、「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある」という項目に対して、28.6%と、30ポイント近い差で魅力化校の生徒の肯定的回答割合が高くなっている。
- 同様に、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」で27.2%、「共同作業だと、自分の力が発揮できる」で23.4%、「問題意識を持ち、聞いたり調べたりする」で11.7%など、主体性、協働性、探究性に係る意識も全国調査に比べて高くなっている。
- 今回は簡易的な分析であるため、高校魅力化による効果の同定には一定の留保が必要であるが、大規模調査によって初めて見いだされた高校魅力化の効果に関するエビデンスとして、本調査は非常に重要であると言える。

1. はじめに

- ・ 証拠に基づく政策立案(Evidence Based Policy Making(EBPM))に対する要請が高まる中で、教育政策、あるいは学校教育等の教育実践の現場においても、調査データに基づいた意思決定に対するニーズが高まっている。
- ・ EBPM は、内閣府においては「政策の企画をその場限りのエピソードに頼るのではなく、政策目的を明確化したうえで合理的根拠(エビデンス)に基づくものとする¹」と定義している。教育政策、学校教育の現場では、主としてある教育方法やプログラムによる児童、生徒、学生等の教育の受け手の変容(資質・能力の伸びや意識の変容等)を、個別的事例によってではなく、アンケート調査やテスト等の定量的調査手法によって評価し、手段や方法の改善に活かしていくというイメージで、この考え方が受容されているのではないかと考えられる。
- ・ さて、筆者らはこうした潮流に関連し、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、地域と高校との連携による、魅力ある高校づくり(高校魅力化)が、そこで学ぶ生徒に与える効果を定量的に可視化するための仕組みづくり及び検証作業を進めている。本稿では、道半ばではあるものの、その取り組みの経過を紹介するとともに、これまでに蓄積されたデータの分析を通して、高校魅力化による効果の素描を行うことを目的とする。

¹ 内閣府 HP「内閣府における EBPM への取組」(<https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html> 2019年11月14日閲覧)

2. 魅力ある高校づくり(高校魅力化)とは

- ・筆者らは 2017 年度より、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、地域・教育の魅力化、中でも魅力ある高校づくり(高校魅力化)が、そこに通う生徒に与える効果・影響を可視化するための調査設計を進めてきた。以下、この調査を通じて設計した「高校魅力化評価システム」について紹介したい。
- ・議論の前提として、まずは高校魅力化とは何かについて若干の整理を試みておきたい。高校の魅力化という言葉は、2008 年に島根県立隠岐島前高等学校の後援会が、「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会(魅力化の会)」と名称を変更したことにルーツを見出すことができる。離島部のこの地域に1校しかない高校が生徒数減に直面し、高校存続に対する危機感、その延長として地域存続に対する危機感が高まる中で、地域社会が一丸となって、「生徒にとって『行きたい』、保護者にとって『行かせたい』、地域住民にとって『活かしたい』、教員にとって『赴任したい』」(山内、岩本、田中(2015)、p24)魅力ある高校づくりを進めていったこの事例を背景として、高校魅力化とは、「地域社会とともに」進める高校づくりであるということ、また、地域社会の将来的な担い手を育成するという目的も有するものであること、等の特徴を見出すことができる²。
- ・こうした、「地域社会とともに」進める魅力ある高校づくりについて、そこにおける生徒の学び・暮らしの視点からみた特徴が整理されているのが図表1である。地域社会に開かれた高校づくりを通して、生徒は手触り感のある「実社会」での実践的な学びの経験から、これからの社会で求められる資質・能力を獲得していくことが期待されている。

図表 1 高校魅力化とは何か

「高校魅力化」とは

「高校魅力化」とは…

(どこで) ● 地域という実社会の中で学ぶ

(手触りの実物未来社会の箱庭で学ぶ)

(誰と) ● 多様な人々と学ぶ

(地域の子ども、都会から来た子ども、外国から来た子ども、地域で挑戦する大人、都会から来た大人と学ぶ)

(何を) ● 社会の縮図体験としての3年間を過ごす

(自らみつけたテーマに対し自ら動き、失敗し、支援から学ぶ)

…という体験を通して

未来の社会をつくる“意志ある若者”を育む教育活動

資料) 教育再生実行会議高校改革ワーキング・グループ第2回 水谷委員提出資料(2018年9月27日開催)

² 詳しくは、山内、岩本、田中(2015)『未来を変えた島の学校—隠岐島前発ふるさと再興への挑戦—』(岩波書店)を参照。

3. 魅力ある高校づくり(高校魅力化)の調査設計

(1) 設計プロセス(経緯)

- ・ 高校魅力化に関する上記のような認識を前提として、筆者らは 2017 年度より、「高校魅力化評価システム」の内容検討を開始した。同年度に基本的な構造を設計したのち、2018 年度に島根県の協力を受け、高校魅力化に取り組む県立高校を対象に試行的に調査を実施し、内容の改善を行った。2019 年度からは、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」³の指定校等を対象に、この評価システムを用いた PDCA サイクルの推進(評価の実施と振り返りによる事業改善)を実施するなど、評価結果の教育現場での活用に取り組んでいる。
- ・ なお、「高校魅力化評価システム」の調査設計にあたってのより詳細にわたるプロセスは、地域・教育魅力化プラットフォーム編(2019)『地域協働による高校魅力化ガイド』10 章「高校魅力化の評価」をご参照いただきたい。

(2) 調査設計の概要

- ・ 「高校魅力化評価システム」は、魅力ある高校づくりによる、生徒の資質・能力、意識等の変化を「見える化」することを目的としたアンケート調査である。加えて、高校魅力化に取り組む各高校、地域、換言すれば高校に関わる教員、地域の大人が、自らの実践を振り返るための、現状の取り組みの「見える化」のためのツールでもあることが特徴となっている。
- ・ 上記の特徴から、アンケート調査は、生徒の資質・能力、意識等の変化を捉える設問に限らず、教育実践のインプット(=手段)に関する指標も盛り込んでいる。以下の図表 2 に示すのが、「高校魅力化評価システム」が捉える 5 つの要素であるが、このうち①、②が教育実践に関する指標、③から⑤が生徒の変化を捉える指標となっている。

図表 2 「高校魅力化評価システム」が調査対象とする 5 つの要素



出所) 弊社作成

³ 本事業に関連する情報については、文部科学省 HP を参照。(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1407659.htm)

- ・ アンケート調査は現在のところ「生徒用」「大人用」の2種類作成しており、生徒は①から⑤のすべての質問に回答する。対して大人用については、②の「地域の学習環境(学びの土壌)」を自己評価するための質問に回答する形式となっている。

図表 3 「高校魅力化評価システム」の調査内容及び対象

| 調査を行う要素 | 調査対象 | | 要素の概要 |
|----------|------|----|--|
| | 生徒 | 大人 | |
| ①生徒の学習活動 | ○ | | 高校における様々な学習活動の中で、生徒が行っている学習活動の頻度 |
| ②地域の学習環境 | ○ | ○ | 生徒の周囲(高校や地域社会)における、学習活動等に係る人との関係性や、機会、雰囲気の有無 |
| ③生徒の能力認識 | ○ | | 生徒の、自らの資質・能力に関する主観的認識(評価) |
| ④生徒の行動実績 | ○ | | ここ最近(1ヵ月以内)の生徒の実際の行動の有無 |
| ⑤生徒の満足度 | ○ | | 生徒の学校、生活への総合的な満足度 |

出所)弊社作成

(3) 生徒の資質・能力、意識を捉える質問の設計

- ・ 生徒の資質・能力認識を捉えるにあたって、どのような枠組みを設定するかについては、実際に高校魅力化に取り組む高校関係者との意見交換や、平成 29・30 年改訂学習指導要領の記載内容やそれに関連する会議等での議論を踏まえ、以下の通り、「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4要素を設定しており、各視点に複数の質問項目を位置づけている(詳細は(4)で詳述)。
- ・ なお、アンケート調査という表現からわかる通り、生徒の資質・能力、意識等の変化の可視化については、テスト理論等に基づいた何らかの課題(テスト)を要求、実施するものではなく、あくまで回答者の主観的な評価を尋ねるものである。

図表 4 「高校魅力化評価システム」で捉える4つの資質・能力の視点



出所)弊社作成

(4) 評価システムの各要素の詳細

① 生徒の学習活動

- ・高校における様々な学習活動の中で、生徒が行っている学習活動の頻度について、「よくする／時々する／あまりしない／ほとんどしない」の 4 つの選択肢で尋ねている。地域社会とともに進める魅力的な高校づくりという観点から、地域社会をフィールドないし対象とした学習活動の頻度を多く尋ねているのが特徴である。

図表 5 「生徒の学習活動」に係る主な指標(抜粋)

| 関連する資質・能力の視点 | 質問項目例 |
|--------------|---|
| 主体性 | <ul style="list-style-type: none"> ・自主的に調べものや取材を行う ・学校外のいろいろな人に話を聞きに行く / 等 |
| 協働性 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力しながら学習や調べものを行う ・活動、学習内容について大人(教員や地域の大人)と話し合う / 等 |
| 探究性 | <ul style="list-style-type: none"> ・活動、学習のまとめを発表する ・生徒同士で活動、学習の振り返りを行う / 等 |
| 社会性 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の魅力や資源について考える ・地域の課題の解決方法について考える / 等 |

出所) 弊社作成

② 地域の学習環境(学びの土壌)

- ・高校魅力化の実践において成果をもたらす要因(実践)を把握することを目的として、調査設計過程において、島根県隠岐島前高等学校の高校生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、下記の回答抜粋にあるように、生徒にとっては、「何を学ぶか」ということと同等以上に、「誰と学ぶか」や「どのような環境で学ぶか」といった関係性の次元に関することが、非常に重要であるという洞察が得られた。

図表 6 「自己の成長」を促した要因に対する生徒の認識(抜粋)

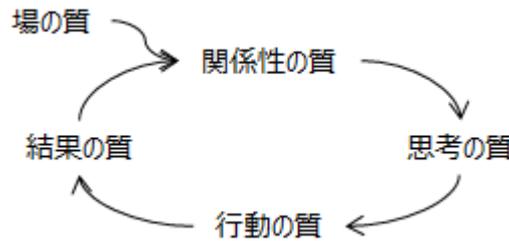
| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・色々な人が行動しているのを間近で見えて感化された ・日常生活の中で多くの人と触れ合う機会があった ・自分は自分で良くて、他人の夢や行動と同じようにしなくても良いと言ってくれたスタッフの人 ・本気なら全力で応援してくれる大人・地域の人がいる ・色々なことをしている人を見てチャレンジすることへのハードルが低くなった ・先生との面談で夢を実現するためにどうすれば良いか明確になった ・OB が島に連れ出してくれたり、地域の人にあわせてくれたり、手伝いの楽しさを経験させてくれる |
|---|

出所) 2017 年度に実施した島根県立隠岐島前高校の生徒に対するアンケート調査結果

- ・成果を生み出す企業組織のソフトな要因に着目する組織開発論や「学習する組織」論の研究分野においても同様の着眼がみられる。小田理一郎『「学習する組織」入門』(2017)によると、「学習する組織」の提唱者であるピーター・センゲとともに、マサチューセッツ工科大学組織学習センターを創設したダニエル・キムは、「グループで一緒に、探求、考察、内省を行うことで、自分や他の意識と能力を共同で高めるプロセス」(同書 p.221)を円滑に実行するために働きかけるべき要素について、「組織の成功エンジン」として整理を行っている。

- ・この理論では、チームの成果である「結果の質」を高めるためには、「より源流に近い、思考の質や関係性の質への働きかけ」(同 p.222)が重要であるとされる。高校魅力化評価システムにおける地域の学習環境(学びの土壌)への着目も、こうした関係性の質を可視化しようとするものとして位置付けることができる。
- ・また先述の調査の中で、こうした地域の学習環境の質を高めるには、高校、地域社会において生徒に接する大人のあり方が重要であるという洞察も得られたことから、大人自身による学習環境への寄与について自己評価、振り返りを行うための大人向け調査を設計するに至っている。

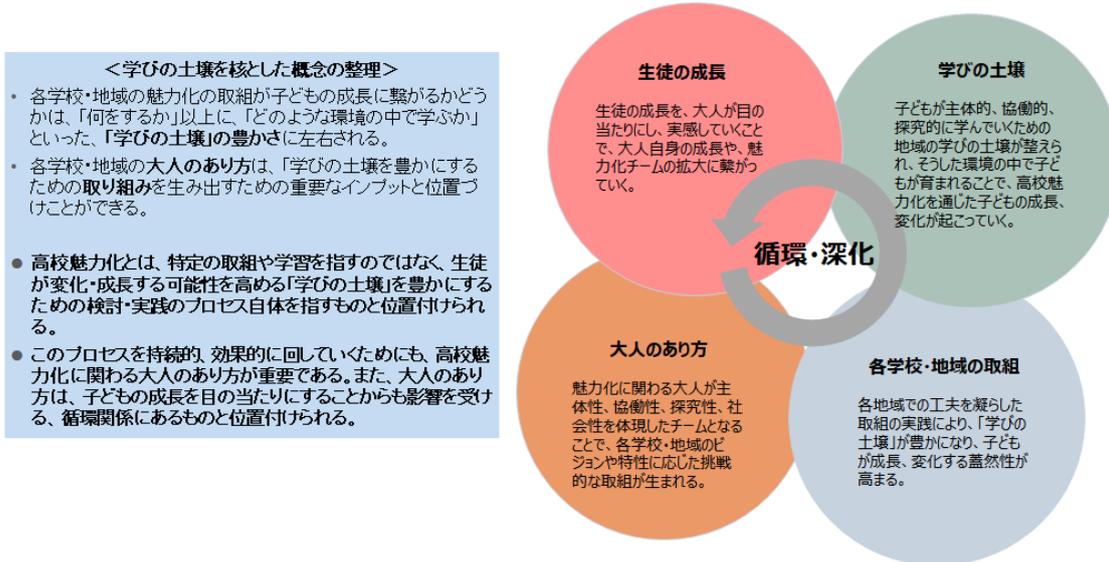
図表 7 ダニエル・キムによる「組織の成功エンジン」



出所) 小田理一郎 (2017) 『「学習する組織」入門』英治出版。

原典) Daniel Kim, Organizing for Learning: Strategies for Knowledge Creation and Enduring Change (2001)

図表 8 「高校魅力化評価システム」における「学びの土壌」を核とした概念整理



出所) 弊社作成

- ・こうした着想をベースに、再度島根県隠岐島前高等学校の高校生を対象に実施したアンケート調査を整理し、生徒の資質・能力の4つの視点に対応する形で、4つの学習環境(=学びの土壌)をボトムアップのアプローチで設定した。「あてはまる/どちらかと言えばあてはまる/どちらかと言えばあてはまらない/あてはまらない」の4つの選択肢で尋ねている。

図表 9 「地域の学習環境」に係る主な指標（抜粋）

| 学びの土壌の要素 | 質問項目例 |
|--------------------|--|
| 挑戦の連鎖を生む「安心・安全の土壌」 | <ul style="list-style-type: none"> ・挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある ・人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある / 等 |
| 協働を生む「多様性の土壌」 | <ul style="list-style-type: none"> ・ありのままの自分が尊重される雰囲気がある ・自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある / 等 |
| 問う・問われる「対話の土壌」 | <ul style="list-style-type: none"> ・お互いに問いかけあう機会がある ・将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる / 等 |
| 地域や社会に「開かれた土壌」 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域から大切にされている雰囲気を感じる ・地域の人や課題など、興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる ・自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある / 等 |

出所) 弊社作成

③ 生徒の能力認識

- ・生徒自身による、自己の資質・能力、また意識に関する認識を尋ねる質問群である。「あてはまる／どちらかと言えばあてはまる／どちらかと言えばあてはまらない／あてはまらない」の4つの選択肢で尋ねている。
- ・あくまで回答者の主観的な評価を尋ねるものであることから、その限界点に留保が必要であるものの、複数年の調査結果を比較することにより、生徒の認識の変化、伸長を把握することもできる。また一部質問では、全国的な調査と類似の項目を用いており、それら結果との比較を可能とする設計になっている。

図表 10 「生徒の能力認識」に係る主な指標（抜粋）

| 関連する資質・能力の視点 | 質問項目例 |
|--------------|---|
| 主体性 | <ul style="list-style-type: none"> ・うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む ・目標を設定し、確実に行動することができる / 等 |
| 協働性 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分とは異なる意見や価値を尊重することができる ・共同作業だと、自分の力が発揮できる / 等 |
| 探究性 | <ul style="list-style-type: none"> ・勉強したものを実際に応用してみる ・複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ / 等 |
| 社会性 | <ul style="list-style-type: none"> ・将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある ・将来、自分の今住んでいる地域で働きたいと思う ・将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい ・18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う / 等 |

出所) 弊社作成

④ 生徒の行動実績

- ・ ③の生徒自身による自己認識を補完することを意図して、資質・能力の4つの視点に対応して、回答時点から1か月以内の自己の行動の有無という、ある程度客観的に回答可能な事項について尋ねる質問群を設定した。「あてはまる／どちらかと言えばあてはまる／どちらかと言えばあてはまらない／あてはまらない」の4つの選択肢で尋ねている。

図表 11 「生徒の行動実績」に係る主な指標(抜粋)

| 関連する資質・能力の視点 | 質問項目例 |
|--------------|--|
| 主体性 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいたりした ・授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った / 等 |
| 協働性 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた ・友人などから、意見やアドバイスを求められた / 等 |
| 探究性 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした ・公式やきまりを習う時、その根拠を理解するように、自分で考えたり調べたりした / 等 |
| 社会性 | <ul style="list-style-type: none"> ・いま住んでいる地域の行事に参加した ・地域社会などでボランティア活動に参加した ・先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした / 等 |

出所) 弊社作成

⑤ 生徒の満足度

- ・ 生活全般への満足度、学校満足度(この学校に通ってよかったと思う)など、調査を実施した高校、地域が、その取り組みを総合的に振り返り、評価するための質問を設定した。

(5) 調査の実施

- ・ 本調査は、高校魅力化の成果を「見える化」するための調査設計を行っていると同時に、高校魅力化に取り組む各高校、各地域が、自らの取り組みを振り返るための材料として用いられることも想定している。調査は、高校魅力化の取り組みを評価したいと考える教育委員会、あるいは高校を単位として実施されることを想定している。調査結果は、調査実施校に対して結果の要点をまとめたうえで還元を行っている。
- ・ 2018年度に島根県教育委員会に協力をいただき、試行的調査を行った後、2019年度においても、複数の教育委員会、および文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定校を対象に、本評価システムを用いた検証、各高校の取り組みの振り返りに対する支援を行っている。

4. 調査分析

(1) 高校魅力化の成果の「見える化」

- ・ これまでに見てきた通り、高校魅力化評価システムは、複数年にわたる調査設計を踏まえ、ようやく 2019 年度より、本格的に各地域への導入、実施が進んできている段階である。そのため、現段階では高校魅力化の効果については、はっきりと「見える化」できているとは言えない(詳細の結果が出た時点で、改めてレポートを公表することとしたい)。また、こうした教育の成果について検討するためには、複数年にわたり同一の対象に調査を実施し、前後比較を行うなど、変化を把握するための調査設計も必要である。こうした点からも、本格的な検証作業は今後に委ねられていると言える。
- ・ こうした現状に留保が必要であるが、本稿では、評価の設計段階で実施した以下の 2 種類の調査結果、および質問設計において参考とした国による全国的調査結果の一部を示すことにより、高校魅力化の効果等について考察を行うこととしたい。
- ・ 高校魅力化評価システム調査設計段階で、筆者らが関わり実施した 2 種類の調査概要を以下に示す。いずれの調査も、高校魅力化評価システムの枠組みに基づく調査となっており、上記で説明してきた質問項目を中心に構成されているものである。このうち、島根県が実施した「平成 30 年度高校魅力化における学習環境アンケート」は、同県において中山間地域・離島に位置する県立高校 16 校が対象となっている。これらの高校は、魅力化の取り組み開始時期にはそれぞれ差があるものの、島根県教育委員会が平成 23 年度から行う「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の中で、高校魅力化に関わる各種支援を受けている高校であり、今回は高校魅力化の効果としてこうした高校の調査結果に注目することとしたい(以下、魅力化校と表記する)。

図表 12 「高校魅力化評価システム」に関する試行的調査の概要

| 調査名 | 調査時期 | 調査主体 | 調査方法 | 調査対象 |
|---|-----------------|------------------------|------------------|---|
| 高校生と地域社会との関わりに係る実態調査 ⁴ 以下、【MURC 調査】 | 2018 年 2 月 | 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング | インターネットアンケート調査 | 国公立高校に通う現役高校生及び 20 歳以下の公立高校卒業生 ※以下の分析では、前者の現役高校生(n=515)のみを対象とした分析結果を表示。 |
| 平成 30 年度 高校魅力化における学習環境アンケート 以下、【島根県調査】 | 2018 年 4~5 月 | 島根県 | 紙の調査票を高校経由で配布、回収 | 県内の中山間地域・離島に位置する県立高校 16 校の全校生徒 (n=4,105) |

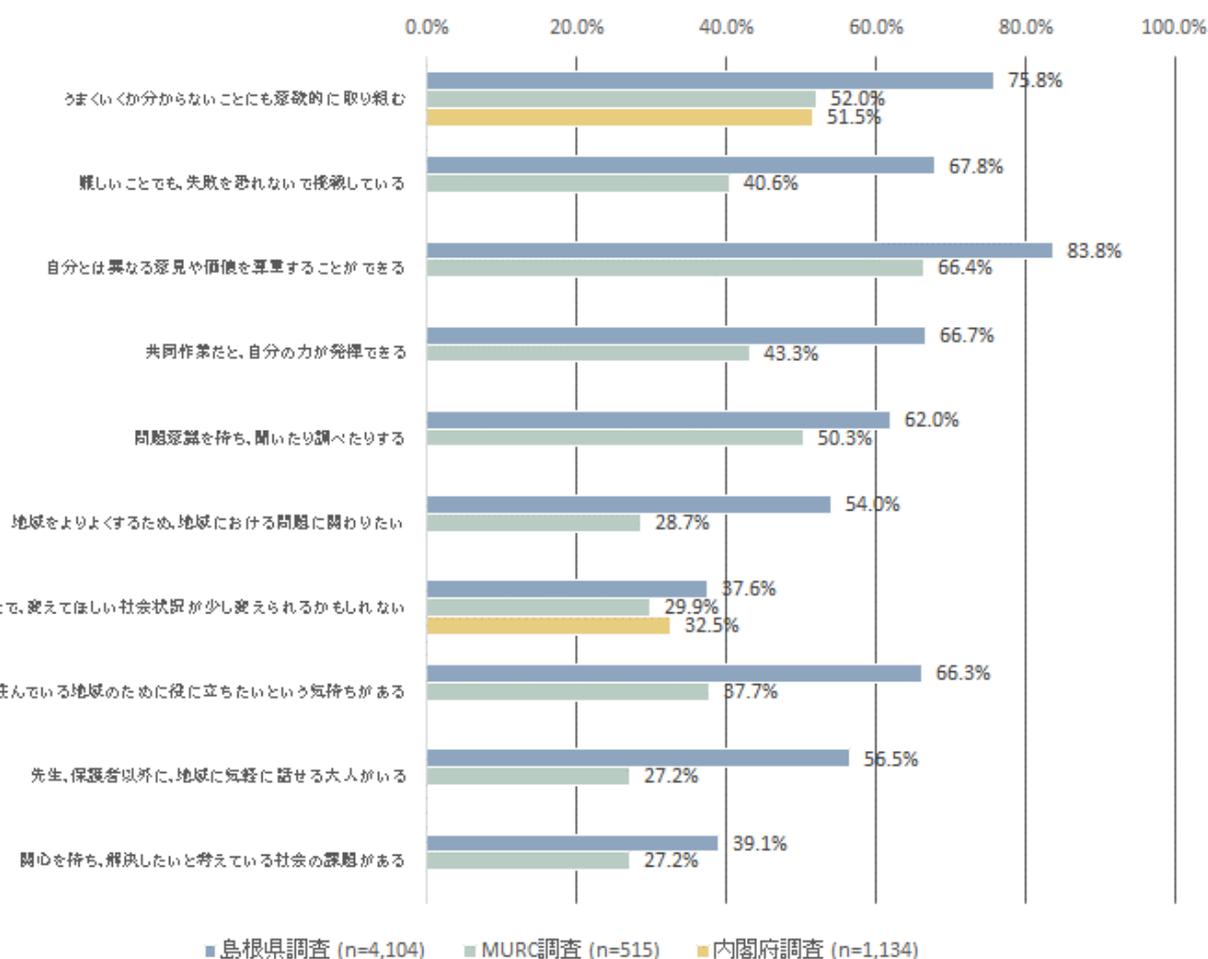
出所)弊社作成

⁴ 本調査結果について詳しくは、「【お知らせ】高校生と地域社会との関わりに係る実態調査(結果速報)」(https://www.murc.jp/publicity/news/news_180419/)を参照。

(2) 調査結果

- ・ 先述の2種類の調査は、その多くの質問が、同一の質問項目及び選択肢で構成されていることから比較が可能である。質問項目が多岐にわたるためすべての質問についてここに掲載することはできないが、高校魅力化で求められる主体性、協働性、探究性、そして社会性をわかりやすく表現していると思われる設問を中心に、抜粋して比較を行った結果が以下のグラフである。
- ・ なお、グラフ中にある「内閣府調査」とは、内閣府が島根県調査、MURC 調査と同じ 2018 年に実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 30 年度）」のことを指している（詳細は脚注を参照⁵）。本調査は満 13 歳～満 29 歳の若者を対象としていることから、やや対象が異なる点に留意が必要であるものの、若者の地域や社会に対する意識等を豊富に尋ねており、高校魅力化評価システムの質問項目を検討する際も参考としている。

図表 13 「高校魅力化評価システム」に関する試行的調査の結果（抜粋）



注) 島根県調査、MURC 調査の数値は、各質問について、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」の回答の合計値。内閣府調査は、同様に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答の合計値。

出所) 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング「高校生と地域社会との関わりに係る実態調査」、島根県「平成 30 年度 高校魅力化における学習環境アンケート」、内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 30 年度）」より弊社作成。

⁵ 本調査は、日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの 7 개국、各国満 13 歳から満 29 歳までの男女に対して行われた調査である。調査時期は 2018 年 11 月から 12 月で、WEB 調査により実施された。各国の統計データをもとに性別、年齢区分、地域別の標本数割り当てを行っており、1,000 サンプル回収を原則として実施したところ、日本は 1,134 の回収数が得られている。詳しくは、<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf/index.html> を参照。

- ・ 比較の結果を見ると、島根県における魅力化校において、各質問に対する肯定的な回答の割合が高く表れていることが読み取れる。特に、「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある」や「地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい」など、社会性に対する意識において、25 ポイント以上の非常に大きな差がみられるほか、「先生、保護者以外に、地域に気軽に話せる大人がいる」という、地域社会と高校生の繋がりにおいても、魅力化校と MURC 調査の差は 29.3 ポイントと大きくなっている。
- ・ また、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」で 27.2 ポイント、「共同作業だと、自分の力が発揮できる」で 23.4 ポイント、「問題意識を持ち、聞いたり調べたりする」で 11.7 ポイントの差がみられるなど、主体性、協働性、探究性に係る意識においても、同様の傾向が得られている(末尾の参考資料を参照)。
- ・ なお、一部、内閣府調査と比較可能な質問については内閣府調査の結果も載せているが、MURC 調査と同様の回答傾向が得られており、翻って、MURC 調査が全国的な若者の意識に係る傾向から大きく乖離しているとは言えないものとも考えられる。

5. 結語: 今後の課題と展望

- ・ 以上、高校魅力化評価システムの調査設計を紹介したうえで、その結果を用いて、高校魅力化の効果の一端に迫る分析結果を見てきた。
- ・ 最後に本調査の課題(限界)を述べる。今回行った分析は、単年度の意識調査の比較に留まるため、高校魅力化の実践校において生徒の資質・能力が高いということは分かるが、それが高校での「伸び」であるのかという点について検証できないことが挙げられる。加えて、今回の比較では、「高校魅力化校の生徒／全国の高校生」という大きな分類で比較を行っているゆえに、高校魅力化の中でもどういったインプットや学習活動が効果に影響を与えているのかという細かい分析ができていない点も課題として残る。
- ・ これらの点については、2019 年に継続して実施した島根県での調査結果を踏まえて、分析を深めていきたいと考えている。
- ・ このような制約はありつつも、今回示したデータは、高校魅力化による生徒の資質・能力への影響について、大規模調査により、かつ全国調査との比較において初めて示されたデータであると言える。こうしたデータをもとに、魅力ある高校づくりに関する議論、行動が進展することを期待したい。

参考資料

図表 生徒の能力認識、行動実績に係る島根県調査とMURC調査の比較結果一覧

| | 島根県調査 n=4,104 | MURC調査 n=515 |
|--|------------------|-----------------|
| うまくいか分からないことにも意欲的に取り組む | 75.8% | 52.0% |
| 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している | 67.8% | 40.6% |
| 家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する | 67.2% | 48.7% |
| 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる | 61.8% | 50.3% |
| 目標を設定し、確実に行動することができる | 59.0% | 48.3% |
| 問題意識を持ち、聞いたり調べたりする | 62.0% | 50.3% |
| 複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ | 39.1% | 35.9% |
| 相手の意見を丁寧に聞くことができる | 83.9% | 73.8% |
| 異なる意見について考えるのは楽しい | 67.4% | 55.9% |
| 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる | 83.8% | 66.4% |
| 共同作業だと、自分の力が発揮できる | 66.7% | 43.3% |
| 多様な考え方の人と関わって多くのことを学びたい | 76.8% | 64.1% |
| チームの方が、自分1人よりも決定をと思う | 86.0% | 63.5% |
| 情報を、勉強したことや知っていることと関連づけて理解することができる | 70.2% | 54.6% |
| 勉強したものを実際に応用してみる | 58.9% | 48.5% |
| 忍耐強く物事に取り組むことができる | 68.4% | 52.6% |
| 自分を客観的に理解することができる | 65.1% | 55.0% |
| 自分の考えをまっさら相手に伝えることができる | 63.9% | 46.8% |
| 友達の前で自分の意見を発表することは得意だ | 46.8% | 41.0% |
| 自分にはよいところがあると思う | 66.0% | 58.3% |
| 私は、自分自身に満足している | 43.3% | 29.1% |
| 18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う | 76.6% | 65.9% |
| 地域をよりよくなるため、地域における問題に関わりたい | 54.0% | 28.7% |
| 私が関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない | 37.6% | 29.9% |
| 将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある | 66.3% | 37.7% |
| 地域の課題と世界の課題は、お互いに関連しあっていると感じる | 54.6% | - |
| 地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい | 50.0% | - |
| 地域社会の魅力や課題について、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる | 45.7% | - |
| 社会をよくするために何をすべきか考えることがある | 51.1% | 38.8% |
| 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う | 50.4% | - |
| 将来、海外で仕事等をしてみたい | 31.9% | - |
| 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい | 31.2% | 27.6% |
| いま住んでいる地域の行事に参加した | 47.6% | 28.2% |
| 地域社会などでボランティア活動に参加した | 38.9% | 23.9% |
| 授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きこいたりした | 73.5% | 62.7% |
| 自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた | 63.4% | 44.3% |
| 友人などから、意見やアドバイスを求められた | 64.3% | 52.4% |
| 授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った | 48.0% | 48.0% |
| 授業の内容について、「なぜそうなったのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした | 56.2% | 49.7% |
| 公式やまきを習う時、その根拠を理解するように、自分で考えたり調べたりした | 55.2% | 41.2% |
| 先生、保護者以外に、地域に気軽に話せる大人がいる | 56.5% | 27.2% |
| 関心を持ち、解決したいと考えている社会の課題がある | 39.1% | 27.2% |

注) 数値は、各質問について、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」の回答の合計値。

出所) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング「高校生と地域社会との関わりに係る実態調査」、島根県「平成30年度 高校魅力化における学習環境アンケート」より弊社作成。

参考文献

山内道雄、岩本悠、田中輝美(2015)『未来を変えた島の学校—隠岐島前発 ふるさと再興への挑戦—』岩波書店

小田理一郎(2017)『「学習する組織」入門』英治出版

地域・教育魅力化プラットフォーム編(2019)『地域協働による高校魅力化ガイド』岩波書店

— ご利用に際して —

- 本資料は、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所:三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要です。当社までご連絡ください。

ご利用に際してのご留意事項を最後に記載していますので、ご参照ください。

(お問い合わせ)コーポレート・コミュニケーション室 TEL:03-6733-1005 E-mail: info@murc.jp